

はの英語学
はじめ
て

English Linguistics: An Introduction Revised Edition

改訂版

長谷川 瑞穂 編著

大井 恭子 木全 睦子 森田 彰 高尾 享幸 著

研究社

まえがき

理論や抽象的な概念からではなく、なるべく身近なところから興味を引き出し、学ぶことの楽しさを知ってもらいたい...という思いで、本書を執筆しました。“ことば”という分野は人間の本質に深く関わっているので、ことばについて学ぶことは人間の本質を探ることになりますし、社会の動きについて、あるいは歴史について考えを深めることになります。

本書のねらいは英語ということばの輪郭と背景をできるだけ身近なところから理解してもらうこと、そしてことばを学ぶ楽しさを知ってもらい、そこから時には深く、時には広く自分で考えてもらうことにあります。最近のことばに関する研究は理論を中心とした分野ばかりではなく、関連する領域と交わる学際的な分野を含む幅広く、自由な雰囲気を持った楽しい分野となっています。そのような見地から本書は、理論にとらわれず英語の輪郭や背景について5人の執筆者ができるだけ平易に、丁寧に記述するよう心がけました。また、各章の冒頭に、テーマへの導入として「解かれる疑問」を設け、各章で読者に何を学んでほしいかを明確にしました。各章の終わりには、「課題」を設け、読者に実例を探してもらったり、それぞれのテーマに関する研究方法を探ってもらったりという工夫をしたつもりです。

以下に各章の概略を紹介しましょう。

第1章では、ことばの起こりと、英語が系統的に他の言語とどのような関係にあるかを概説します。第2章は、ことばの研究領域や研究方法について解説します。

第3章は、英語の発音とスペリングのずれがどのように起こってきたかを説明します。第4章は、英語の単語が他の言語の影響を受けながらどのように増えてきたか、時代を追いながら概観します。第5章では、標準的な英語がいつ頃どのようにして生まれてきたかを英米を中心に解説し

ます。第6章は、イギリス英語、アメリカ英語、その他の国々の英語にはどのような特徴があるかを概説します。第7章は、英語が時代とともにどのように変わってきたかを概観します。

第8章から12章では、英語そのもののしくみを、音、単語、文と段階を追って解説しています。第8章と第9章では、実際の発音のしかたから音と音のつながり、そしてアクセントやリズムについて概説します。第10章は単語についての章です。複雑な単語が決まりにそって組み立てられていることや新しい単語のできかたを説明しています。第11章と第12章は、文の組み立て、いわゆる「文法」の話ですが、これらの章を読んで、英語のみならず人間のことはすべて、かなり整然とした決まりの上でできあがっている、すなわち、整然としたしくみを持っていることに気づいてほしいと思います。

第13章から17章は、ことばの意味について考察します。第13章ではことばの意味とは何かという問題を、第14章では語どうしの意味関係について解説しています。第15章は意味の拡張を扱っています。特に、主要な意味拡張のプロセスであるメタファーとメトニミーについて解説します。第16章は、話者が対象をどうとらえるかがことばの意味にどのように関係するか、という問題を考えます。第17章では、表現の意味が実際の使用場面でどう解釈されるかについて解説しています。

第18章は、一文単位を超えた文章の中で紡がれる「結束性」について説明します。第19章は、文章中に提出される情報の順序により影響を受ける意味の差や情報のつながりについて詳述します。第20章は、会話の中に見られる「協調の原理」や「会話の含意」について、豊富な例をもとに解説します。第21章は、デル・ハイムズが唱えた「コミュニケーションの民俗誌」という考え方を取り上げます。第22章は「英語と文化」というタイトルのもと、言語を文化的側面から考察します。

第23章は、社会階級などによることばの違いを概観します。第24章は、英語圏の代表的な4ヵ国の言語問題や言語教育について述べています。最後の第25章は、日本の英語教育の歴史と主な英語教授法を紹介してあります。

なお、各章の執筆者は次のとおりです

長谷川瑞穂	1～2章	高尾享幸	13～17章
森田 彰	3～7章	大井恭子	18～22章
木全陸子	8～12章	長谷川瑞穂	23～25章

本書では英語ということばのほんの一部を見てもらったにすぎませんが、読者のみなさんが英語ということばについてさらに広く、深く学んでいくきっかけになれば幸いです。本書の企画から完成にいたるまで、研究社編集部の杉本義則氏には多大の労力を割いていただき、またしばしば励ましていただき、こころから感謝を申し上げたいと思います。

* * *

『はじめての英語学』を2006年に出版して以来、お使いいただいた先生方からご指摘、ご忠告をいただき、著者一同感謝申し上げます。今回の改訂では、それらのご指摘にお答えするよう最大限の努力をいたしました。また、8年の歳月の間に学習指導要領が新しくなり、世の中の変化もあり、それらにできるだけ対応したつもりです。引き続きご使用いただければ幸いです。また、学生諸君には、本書を通し、ことばの奥深さ、世の中の動きとの関連を知る楽しさなどを味わっていただければ幸いです。

2014年9月

編 著 者

目 次

まえがき *iii*

第 1 章	ことばの起源と語族	2
	1. ことばの起源	2
	2. 語族とは？	4
第 2 章	人間のことばと言語研究	10
	1. 人間のことばの特徴	10
	2. 言語研究の対象	12
	3. 言語研究の分野	12
	4. 言語資料の収集	15
	5. 言語研究の方法	16
第 3 章	英語の発音とスペリング	18
	1. one はオネ、オン、ワン？	18
	2. 英語の文字の起源	19
	3. ローマン・アルファベットと正書法	20
	4. 英語の音の移り変わり	22
第 4 章	英語の語彙の多様性	26
	1. 英語の語彙とその豊富さ	26
	2. 英語語彙の歴史的発展	28
第 5 章	標準英語の成立	34
	1. 共有される知識	34

2. 標準英語の変遷	35
3. アメリカ英語の標準語	39
4. 世界の英語	40
第 6 章 英語のバリエーション	42
1. バリエーションとは何か	42
2. イギリス英語の地域変種	43
3. アメリカ英語の特徴	46
4. 世界の英語圏	47
5. 第 2 言語としての英語、外国語としての英語	47
6. 世界共通の財産としての英語	48
第 7 章 ことばの変化	50
1. 変化の切り口	50
2. 言語の違い	51
3. 英語の歴史的変化	54
4. 変化の要因と変化の速度	56
第 8 章 ことばと音声	58
1. 発音器官	58
2. 言語音を分類する	60
第 9 章 音の組み合わせとアクセント	66
1. 音素とは?	66
2. 音の変化	67
3. 音節とは?	69
4. アクセントとリズム	71
第 10 章 単語ができるしくみ	74
1. 単語の恣意性	74

2. 形態論と形態素 74
3. 語形成(1): 形態素から単語へ 76
4. 語形成(2): 組み合わせによらないもの 79

第11章 文ができるしくみ 82

1. 単語から文へ 82
2. 文法研究の歴史 82
3. 統語構造 83

第12章 文の内部構造 90

1. 英語の句構造: 一般的特徴 90
2. 単文の構造 94
3. 補文の構造 96

第13章 ことばの意味とは何だろう 98

1. 意味論の研究対象としての意味 98
2. ことばの意味は指示対象であるとする説 99
3. 語の意味は他の語との関係により決まるとする説 100
4. ことばの意味は認識の産物とする説 101

第14章 語の間の意味関係 106

1. いろいろな意味関係 106
2. フレームに基づく意味関係 111

第15章 意味の拡張 114

1. メタファー 114
2. メトニミー 117

第16章 ことばの意味に見られる主観性 122

1. 英語の法助動詞 122

2. 主観的視点から見た場合の言語表現	125
3. 主観的移動表現	127
第17章 ことばの意味とコンテクスト	130
1. ことばの意味とことばによって伝えられる意味	130
2. 二種類の話者の意味	131
3. 明意を決めるプロセス	132
第18章 まとまりのある文章	138
1. まとまりのある文章と結束性	138
2. 結束性の5つの要素	138
3. 結束性のある文章	143
第19章 文章中の情報構造	146
1. 情報構造とは?	146
2. 情報の連環	149
3. 情報構造を手がかりに解く	150
第20章 ことばのやりとりにおけるルール	154
1. 語用論とは?	154
2. 協調の原理	154
3. 会話の含意	157
4. 協調の原理の問題点と限界	159
第21章 コミュニケーションの民俗誌	162
1. 「コミュニケーション能力」という概念	162
2. ハイムズのSPEAKINGモデル	163
第22章 英語と文化	170
1. 「ことばに信頼を置く文化」と「言わぬが花の文化」	170

2. サピア = ウォーフの仮説 173
3. 対照修辞学 175

第23章 ことばと社会 178

1. 社会言語学とは? 178
2. ことばの変種 178
3. アフリカ系アメリカ人の英語 (AAVE) 180
4. ピジンとクリオール 182
5. 言語の選択 183
6. PC (Politically Correct) 184

第24章 ことばと国家 186

1. ことばと国家 186
2. イギリス 187
3. アメリカ合衆国 188
4. カナダ 191
5. オーストラリア 192

第25章 日本の英語教育と教授法 194

1. 日本の英語教育の歩み 194
2. 日本での教授法のいろいろ 198

参考文献 202

索引 208

はじめての英語学

〈改訂版〉

ことばの起源と語族

解かれる疑問

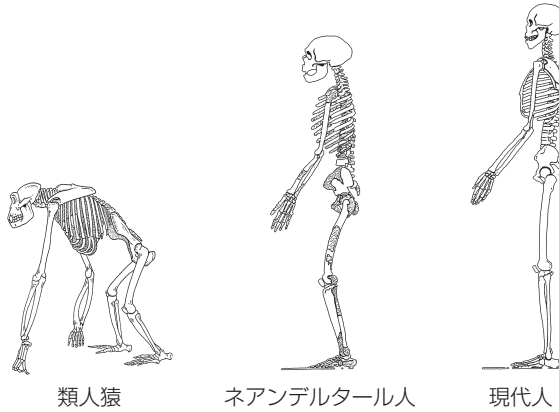
- なぜ人間だけがことばを持っているのでしょうか。
- 人間はいつごろから、どのようにしてことばを話すようになったのでしょうか。
- 英語はどのような言語と親戚関係にあるのでしょうか。

1. ことばの起源

私たち人間が他の動物と大きく異なる点の1つは、「人間はことばを持っている」という事実です。人間のことばの起源に関して多くの実験や研究がなされてきましたが、いまだに確固とした結論は出ていません。というのも、この問題に対しては驚くほど長い年月が関わっているからです。このような研究は言語起源論 (glossogenetics) と呼ばれ、言語の形成と発達を研究対象としています。「人類はいつごろからことばを話すようになったのか」という疑問に対しては、化石の研究を含むさまざまな分野で研究が進められています。旧人と呼ばれるネアンデルタール人(紀元前7万～3万5000年)は少数の母音と子音を発音することができましたが、十分な言語を作り出すことはできなかつたであろうと推察されています。ネアンデルタール人は、ことばが次第に進化し形成される途中の段階を示しています。図1を見ると、類人猿の頭が前屈しているのに比べてネアンデルタール人の頭がまっすぐに伸びているのがよくわかります。

人類のみが持つ身体的特徴の1つは、二本足で立ち、歩くという直立姿勢です。四本足で歩行する他の動物と異なり、人間が直立姿勢で歩行することにより、前足は手となり移動の手段に必要ではなくなりました。手

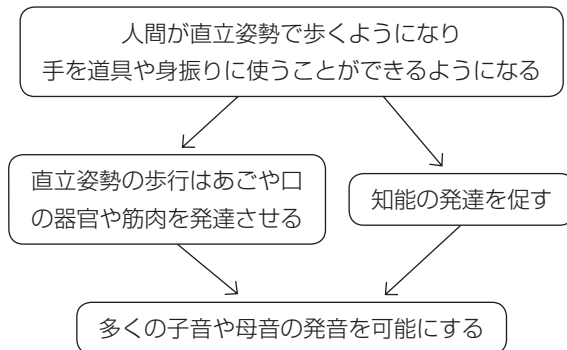
図1 類人猿、ネアンデルタール人、現代人



(From *Human Evolution* by Roger Lewin. Copyright © 1999 by Blackwell Science, Inc. Reprinted by permission of Blackwell Publishing)

は道具を使ったり、身振りでお互いにコミュニケーションをすることに使用されるようになりました。そしてこの事実が人間の知能を発達させたと考えられます。また、二本足の直立姿勢は、さまざまな音を出すのに必要なあごや口の器官の筋肉の発達を促しました。

人間がことばを使うようになった要因は、次のようにまとめることができます。



また、ネアンデルタール人およびそれ以降の時代において、部族の集まり、集団での狩りなど社会的相互依存関係が存在し、コミュニケーション

体系が必要となり、ことばが生まれたとする説が有力です。

人間のみが生まれながらにして言語を習得する能力があるという「言語生得説」はアメリカの言語学者ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky) によって唱えられました。この考え方は霊長類の研究からも立証されています。1950年代にアメリカのヘイズ夫妻がヴィッキーという名のチンパンジーを自宅で自分たちの子どもと一緒に育てる実験をしました。ヴィッキーは数語の単語を覚えるにすぎず、言語は習得できませんでした。他の数々の実験からも、チンパンジーなどはかなりの知能や認知能力を備えているにもかかわらず、言語を習得する能力がないことが証明されています。ことばは人間のみが持っている特性であり、ことばを習得する能力は人間にのみ備わっていると考えられます。

2. 語族とは？

世界の諸言語の歴史をさかのぼり、詳細に比較して親族関係を明らかにする研究は主に18世紀末から行われてきました。言語の発生的な分類は、いくつかの言語が共通の祖先からできたという想定に基づいています。語

表1 主な語族

語族	英語名	主な言語
セム語族	Semitic	アラビア語・ヘブライ語
コーカサス語族	Caucasian	グルジア語
アルタイ語族	Altaic	トルコ語・モンゴル語
ウラル語族	Uralic	フィンランド語・ハンガリー語
シナ・チベット語族	Sino-Tibetan	中国語・チベット語
オーストロネシア語族	Austronesian	インドネシア語・マレー語
オーストロアジア語族	Austro-Asiatic	ベトナム語・クメール語
ニジェール・コンゴ語族	Niger-Congo	スワヒリ語・ズールー語
インド・ヨーロッパ語族	Indo-European	英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、ヒンディ語
ドラビダ語族	Dravidian	タミル語、カンナダ語

族 (family) とは歴史的に親族関係にある言語のグループを表す一般的な用語ですが、現在表1のような主な語族が確認されています。

私たちの母語の日本語はアルタイ語族に属するという説が有力ですが、いまだに確定していません。南インドのドラビダ語族にも言語的に非常に似ています。どの言語がどの語族に属するかをたどることは、民族のルーツをたどることにもつながり、興味深い問題です。

英語が属するインド・ヨーロッパ語族の使用者は、地球上の人口の約半分におよんでいます。16世紀からこの語族の存在が推定されていましたが、1786年にイギリスの東洋学者ウィリアム・ジョーンズ (William Jones) 卿がヨーロッパの諸言語とインドの古い言語サンスクリット語の共通の起源について唱え、その後次々とそれに続く研究が発表されました。その後の研究で、インド・ヨーロッパ語族は次の8つの語派に分けられています。

インド・ヨーロッパ語族

インド・イラン語派	ヒンディ語、イラン語
アルメニア語派	アルメニア語
バルト・スラヴ語派	ロシア語、チェコ語
ギリシャ語派	ギリシャ語
ロマンス語派	フランス語、スペイン語、イタリア語
ケルト語派	ゲール語、ブルトン語、ウェールズ語
ゲルマン語派	英語、ドイツ語、オランダ語、北欧語
アルバニア語派	アルバニア語

インド・イラン語派のヒンディ語は紀元前 1000 年ごろからのサンスクリット語に、イラン語は古ペルシャ語にさかのぼる古い歴史を持つ言語です。アルメニア語は旧ソビエト連邦のアルメニア共和国で主に使用されていますが、やはり古い歴史を持つ言語です。バルト・スラヴ語派には、ロシア語、チェコ語、ブルガリア語などがありますが、それぞれ標準語として公用語の位置を占めています。ギリシャ語は紀元前 1400 年からの古い

〈中 略〉

本 PDF では pp. 6-7 を省略しています

にも多数残っています。現代英語に残るフランス語の語彙に関しては、第4章を参照していただきたいと思いますが、フランス語の流入により英語にはおびただしい数の同義語、類義語が生じました。

例) 本来の英語系 (アングロ・サクソン系)	フランス語系
end	finish
wish	desire
buy	purchase
child	infant
freedom	liberty

日頃英語を学んでいる際に似たような語が多いと気づくのは、以上のような経緯があるからです。また、*OED (Oxford English Dictionary)* によると現代英語の借用語のうち、ラテン語系が30%、フランス語系が22%、ギリシャ語系が11%を占めています。

さらにアメリカに渡った英語はアメリカ先住民諸語、アフリカ諸語、スペイン語などの影響を受けます。借用語の例の一部をあげてみます。

アメリカ先住民諸語:	moose raccoon skunk totem hickory
アフリカ諸語:	okra jazz jumbo tote juke
スペイン語:	cafeteria patio plaza canyon mosquito

日ごろ使っていることばが意外に英語以外からの借用語であると発見するのも楽しいことです。このようにさまざまな言語の影響を受けながら発展してきた英語は、インド・ヨーロッパ語族の中でも最も世界に普及している重要な言語です。

孤立言語

孤立言語とは歴史的に見て他のどの言語とも構造的にほとんど類似点がない言語をさします。したがって表1の語族には組み入れられない言語で、

イベリア語、バスク語、エトルリア語、シュメール語などがあります。イベリア語はローマ時代以前にスペイン南部、東部で話されていました。エトルリア語は現在のイタリアのトスカーナ地方に紀元前6世紀ごろ栄えたエトルリア王国の言語でした。シュメール語は紀元前3000年から2000年までメソポタミア南部で話されていた言語で、文字の残る最古の言語です。バスク語は現在もスペイン北部およびフランス南西部に住むバスク人に使用されている言語で、インド・ヨーロッパ語族の侵入以前に南西ヨーロッパで話されていた言語の名残と考えられています。

課 題

1. ことばがどのようにしてできたかについては、さまざまな説があります。ことばの起源について調べ、それに対する見解があれば述べなさい。
2. ヨーロッパの言語のうちフィンランド語とハンガリー語はウラル語族に属します。フィンランド語、ハンガリー語について調べなさい。
3. 本文で述べられている以外に英語の同意語、類義語を2つ挙げ、*Oxford English Dictionary*などで、それぞれの語源を調べなさい。

読書案内

- Bolinger, D. (1975) *Aspects of Language*. New York: Harcourt, Brace, Javanovich.
- Crystal, D. (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. [2nd ed. (2003)] (風間喜代三・長谷川欣佑監訳『言語学百科事典』大修館書店 [初版訳])
- Jespersen, O. (1922) *Language, Its Nature Development and Origin*. London: George Allen & Unwin.
- 「特集：〈言語の起源〉再考」『言語』2004年6月号、大修館書店。